

## 福島県いわき沿岸でのムラサキウニの初確認 (短報)

藤田恒雄

First found of Japanese purple sea urchin on the coast of Iwaki, Fukushima Prefecture (Short Paper)

Tsuneo FUJITA

ムラサキウニ (*Anthocidaris (Heliocidaris) crassispina* ナガウニ科ムラサキウニ属) は暖海性のウニで、その分布は、太平洋側では茨城県(希)以南とされており<sup>1)</sup>、著者の知る限り福島県沿岸での確認例はなかった。ところが、緊急時環境放射線モニタリング(以下、モニタリング)の検体として漁業者から持ち込まれたキタムラサキウニ (*Strongylocentrotus nudus* オオバフンウニ科オオバフンウニ属) の中に一見違和感を覚える個体が混じっていたので精査し、ムラサキウニと査定したことを報告する。なお、キタムラサキウニとムラサキウニの外見は酷似していると言われているが、ムラサキウニでは、キタムラサキウニと比べて周口部が狭い、キタムラサキウニでは、棘の表面に微細な針状突起があるのに対し、ムラサキウニの棘の表面は平滑である、キタムラサキウニの棘はかすかに緑色を帯びるなどの特徴で区別される<sup>1)</sup>。

今回、種の査定を行った個体は、2022年11月28日にいわき市小浜地先のイメイツと呼ばれる磯で採取されたキタムラサキウニに混入していた2個体である。うち1個体は、一見するとキタムラサキウニのように見えたが、キタムラサキウニより長い棘があり、違和感を覚えたもので、殻径62.0mm(骨格標本では61.1mm)、重量116.1gだった(写真1左)。もう1個体は、キタムラサキウニよりも長い棘が殻の片側にのみ見られ、一見してムラサキウニの特徴を呈したもので、殻径59.7mm(骨格標本混では57.6mm)、重量106.3gだった(写真1右)。

この2個体は、周口部はほぼ同じ殻径サイズのキタムラサキウニより狭く(写真2)、棘の表面にキタムラサキウニに見られる微少な針状突起は見られず(写真3)、また、棘の色は緑色を帯びておらず(写真3)、ムラサキウニの特徴を示していたことから、ムラサキウニと査定した。

更に、口器はほぼ同じ殻径サイズのキタムラサキウニよりも小さく(写真4)、口器中間骨長を測定したところ、殻径—中間骨長の関係は、2022年11月30日までモニタリングでキタムラサキウニとして測定してきた1,665個体の殻径と中間骨長の関係の散布図上のプロットと重ならず、同じ殻径のキタムラサキウニよりも中間骨が短かった(図1)。

また、殻の標本を作ってみると、キタムラサキウニの殻板の乳頭突起は白色なのに対してムラサキウニでは紫色を呈していた(写真5)。

今回の2個体について、年齢を推定するため、中間骨を約500°Cで90秒間焼いて輪紋を観察した結果、輪紋は、キタムラサキウニのもの比べると黒い部分がキタムラサキウニより広く、不鮮明でキタムラサキウニのように輪紋数を明確には読み取れなかったものの、2個体とも2歳ないし3歳と推定された(写真6)。

これまでにモニタリングでキタムラサキウニとして測定してきた1,665個体の殻径と中間骨長との関係をみたところ、今回の2個体だけ散布図のプロットに重ならなかったことから、1,665個

体は全てキタムラサキウニであった可能性が高く、今回初めてムラサキウニが2個体混入したものと考えられた。このことから、当県でのムラサキウニの生息は現時点では非常にまれだと考えられる。一般に、ムラサキウニはキタムラサキウニに対して食用としての価値が劣るとされる。また、青森県日本海において、キタムラサキウニは漁獲量が低迷しており、ムラサキウニは生息数が増大傾向にあるとの報告がある<sup>2)</sup>。当県では漁業生産に支障は出ていないものの、今後は海水温等の変化との関連も含め、注視が必要であろう。

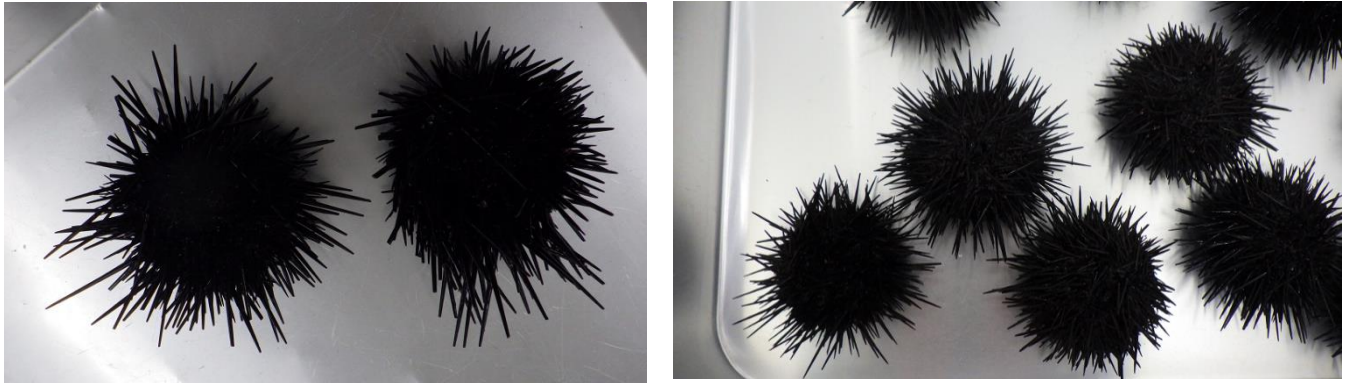


写真1 ムラサキウニと査定したウニ（左）とキタムラサキウニ（右）



写真2 ムラサキウニと査定した周口部（左）とキタムラサキウニの周口部（右）

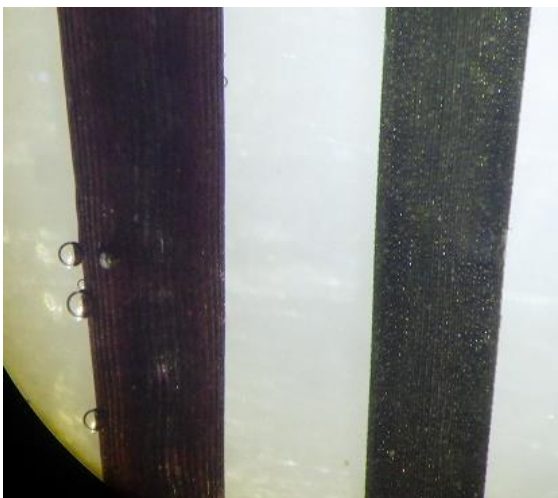


写真3 ムラサキウニと査定したウニの棘（左）とキタムラサキウニの棘（右）



写真4 ムラサキウニと査定したウニの口器（左2個体）とキタムラサキウニの口器（右）

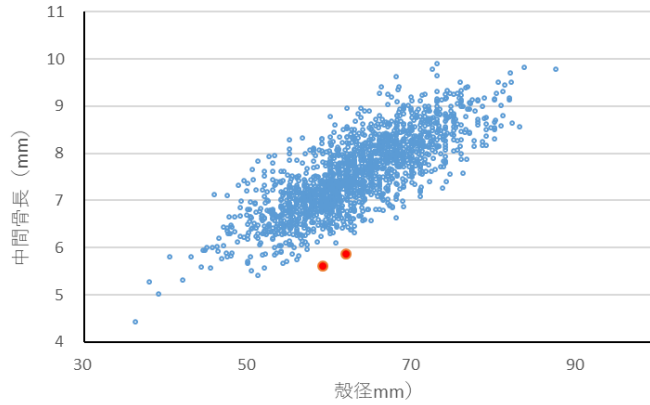


図1 ウニの殻径と中間骨長の関係 (赤点がムラサキウニと査定した2個体)

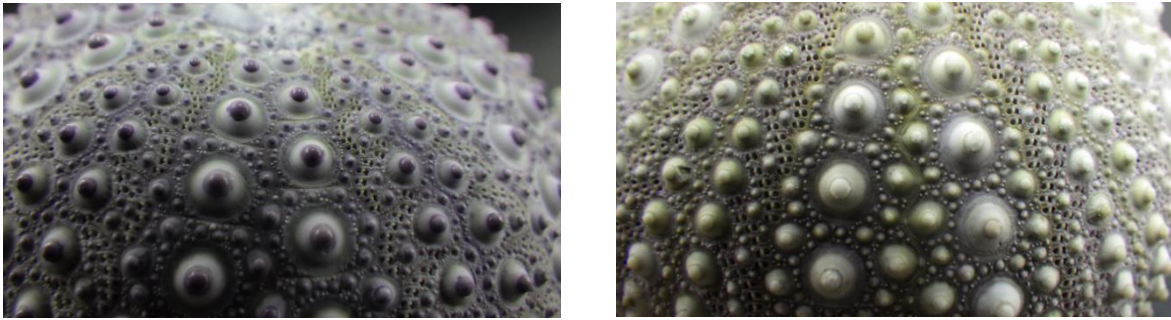


写真5 ムラサキウニと査定したウニの反口側殻板乳頭突起 (左) とキタムラサキウニの反口側殻板乳頭突起 (右)



写真6 ムラサキウニと査定したウニの中間骨輪紋 (左2個体) とキタムラサキウニの中間骨輪紋 (右2個体)

## 文 献

- 1) 原色検索日本海洋動物図鑑Ⅱ、西村三郎編著、保育社(1995)。
- 2) 杉浦大介・木村優輝：青森県日本海におけるウニの資源状態と品質に関する研究、2020年度青森県産業技術センター水産総合研究所事報、487-491(2021)。

